

## スポーツ健康科学部における水泳の授業展開について (II)

水野 かゝみ<sup>1)</sup>

### Study on the class of the swimming in Faculty of Sports and Health (II)

Kagami MIZUNO

2017年4月に中部学院大学スポーツ健康科学部が新設され3年目を迎えた。そのカリキュラム内容は中学・高等学校の保健体育教員免許の取得に必要なスポーツ実技科目が2年次から配置されており、昨年度から複数の種目が開講された。「水泳」については、本学に設備がないため学外の施設を借用しての展開であるが、本年度は単位取得について若干の見直しが行われ、教員志望者以外は選択科目となった。本稿は2年目の授業展開についてまとめたものである。単位を取得することができた46名の受講前の泳力は、全く泳げない者から自信がある者まで様々であったが授業を通してそれぞれの泳力は確実に向上し自信もついたと思われる。また、今回の受講者は教員志望者が大半を占めたため、練習の取り組み方も意欲的で学ぶ姿勢も良かった。事故やけがもなく安全に終わることができ、施設側やプールの一般利用者からのクレームもなかった。しかし、保健体育教員に求められる泳力・指導能力を身につけるには時間が十分ではなかった。今後の指導方法に工夫が必要である。

キーワード：水泳、泳力、指導体制、保健体育教員養成、水泳指導力

#### 目 的

2017年4月に本学のスポーツ健康科学部スポーツ健康科学科が新設されてから今年度は3年目を迎えた。そのカリキュラム内容はすべての学生が中学・高等学校の保健体育教員を目指すことができる内容になっている。特に実技科目は、本学での授業展開が可能な種目に限られているため、卒業単位数を満たすには、学生はほぼすべての種目を履修しなければならない選択の余地がなかった。そこで、可能な範囲で見直しが行われ、実技種目の履修が緩和された。筆者が担当している「水泳」については、教員免許取得希望の学生は必修になるが、それ以外の学生にとっては選択科目となった。昨年度の水泳の授業展開についてはすでに報告(水野, 2018)したが、2学年全員が必修であり、さらに身体状況の理由から水に入ることができない学生の対応まで検討せざるを得なかったことを考えると有効な措置であった。

本稿は本年度の指導体制や受講状況をまとめ、今回の履修条件が変わったことで半期の授業展開にどのような影響を及ぼしたのか、さらなる課題を見出し今後の水泳の授業展開が、本学部の学生にとってより充実した教育内容になることを目的とする。

授業の体制は本学にはプール施設がないため、昨年度と同様、市民プールを週2回(木・金午後2時間)借用して授業を展開した。本年度の授業計画(シラバス)を表1に示す。半期科目であること、小・中・高における学びを踏まえたうえで、保健体育教員として備えておくべき技術や技能を習得できるよう考慮し計画をした(文部科学省, 2017:2018)。時間割の関係で受講生は2クラスに分かれており、それぞれ木曜日クラス・金曜日クラスとし、片道約20分かけてバスで移動し、プールで授業を実施した。大学から市民プールまでの移動は毎回筆者が受講生を引率し、移動中の安全確保のため、バスの乗り遅れや現地に直接個人で移動することは一切認めな

1) スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科

表1 水泳実技 シラバス2019年度版

<b>2019年度 水泳 授業計画</b>				
担当者 水野かがみ				
<p>&lt;科目&gt; スポーツ健康科学部 専門教育系・専門共通科目 半期(前期:16回) 1単位</p> <p>&lt;関連資格・免許&gt; 中学・高校保健体育教員免許取得希望者必修科目(予定)</p> <p>&lt;到達目標&gt; 水と水泳の特性を理解し、自己保全の仕方と各種泳法を身につける。指導者の立場としての心構えや水泳中に起こりうる事故やけがの対処法について理解する。</p> <p>&lt;講義概要&gt; 安全を確保しながらさまざまな泳ぎ方を習得し自己の泳力を高めることをねらいに4泳法(クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ)、横泳ぎ(水府流太田派、立ち泳ぎ(踏み足、巻き足))について学習する。さらにそれぞれの泳ぎ方の指導法及び水泳中に起こりやすい事故に対する対処法について理解する。</p> <p>&lt;授業計画案&gt;</p>				
授業日程	木曜日	金曜日	場所	内容
1	4月11日	4月12日	教室	ガイダンス
2	4月18日	4月19日	プール	水馴れ・泳力判定
3	4月25日	4月26日	プール	泳法(クロール)
4	5月9日	5月10日	プール	泳法(クロール・背泳ぎ)
5	5月16日	5月17日	プール	泳法(クロール・背泳ぎ・ターン)
6	5月23日	5月24日	プール	泳法(平泳ぎ)
7	5月30日	5月31日	プール	泳法(平泳ぎ)
8	6月6日	6月7日	教室	理論
9	6月13日	6月14日	プール	泳法(平泳ぎ・ターン)
10	6月20日	6月21日	プール	泳法(バタフライ)
11	6月27日	6月28日	プール	泳法(バタフライ・ターン)
12	7月4日	7月5日	プール	水泳における救急法と救助法
13	7月11日	7月12日	プール	総合練習
14	7月18日	7月19日	プール	実技テスト
15	7月25日	7月26日	教室	まとめと理論
16	8月1日	8月2日	教室	理論のテスト
<p>&lt;参考文献&gt; 水泳指導教本 (大修館書店)、赤十字水上安全法講習教本(日本赤十字社)</p> <p>&lt;評価方法&gt; 出席状況、受講態度、技術評価、理論評価により総合的に評価する</p> <p>&lt;受講上の注意&gt; 実技は関市の市民プールで行うため、履修者全員で毎週大学よりバスで移動する。<u>13:00発のため、必ず昼食をすませ、必要なもの(水着・帽子、ゴーグル、タオル、筆記具、ロッカー用の100円玉、その他)だけを持参してバス乗り場に集合する。</u>この時点で間に合わなかった者は欠席となるので注意すること。また、往復の移動のバスの中で健康チェック及び学習成果のチェックを行うため<u>筆記用具は必ず持参する。なお遅刻・見学は一切認めない。</u></p>				

かった。また、バスでの移動時間を有効に活用するため、往きのバスの中では点呼後に毎回問診票を用いて授業前の体調のチェックを行い、参加の有無について各自が判断した上で提出をさせた。さらに授業終了後は、帰りのバスの中で体調のチェックをし、その回の授業評価および感想・反省を記載し、降車時に提出をさせた。

## 方 法

### 1. 調査対象者

2019年度水泳実技受講者46名(受講対象者のうち単位が取得できた者)

### 2. 調査期間

2019年4月～8月、前期の水泳の授業の時間内

表2 受講者の特徴について

質問項目	%		
	はい	どちらともいえない	いいえ
1. あなたは身体を動かすことが好きですか。	97.8	2.2	0.0
2. あなたは夢中になれるスポーツがありますか。	87.0	8.7	4.3
3. あなたは小・中・高の体育の授業は好きでしたか。	89.1	8.7	2.2
4. 体育の成績評価は全般に良かったですか。	84.8	13.0	2.2
5. あなたは運動能力に自信はありますか。	60.9	26.1	13.0
6. あなたは体力に自信はありますか。	50.0	21.7	28.3
7. あなたは健康だと思っていますか。	82.6	13.0	4.4
8. あなたはスポーツを見ることが好きですか。	91.3	6.5	2.2
9. 赤ちゃんを見てかわいいと思いますか。	91.4	4.3	4.3
10. あなたは幼児と遊ぶことができますか。	73.9	21.7	4.4
11. あなたは子どもが好きですか。	71.8	21.7	6.5
12. あなたは小学生と遊ぶことができますか。	67.4	23.9	8.7
13. あなたはお年寄りと会話ができますか。	80.4	19.6	1.0
14. あなたは初対面の人と平気で会話ができますか。	36.9	43.5	19.6
15. あなたは明るい性格だと思いますか。	67.4	23.9	8.7
16. あなたは忍耐力がありますか。	43.5	37.0	19.5
17. あなたは努力家ですか。	26.1	52.2	21.7
18. あなたは運動やスポーツを教えたことがありますか。	84.8	6.5	8.7
19. あなたは機会があれば教えたいと思いますか。	67.4	23.9	8.7
20. あなたは運動やスポーツの指導者になりたいと思いますか。	65.2	32.6	2.2
21. あなたは学校の体育の先生になりたいですか。	56.5	32.6	10.9
22. あなたはもっとうまくなりたいと思っている運動技術がありますか。	82.6	10.9	6.5
23. あなたは運動・スポーツに関する本は読む方ですか。	26.0	37.0	37.0
24. あなたは運動・スポーツに関するビデオやDVDは見る方ですか。	60.8	19.6	19.6

### 3. 調査の種類

調査は以下の4種類とした。①表2に示すような受講生の性格特徴、運動・スポーツに対する態度などに関する調査 ②水泳経験、泳力、指導力などに関する調査 ③学生の学習評価については表3で示すような授業時間内の受講者の行動や態度などに関する調査（全日本スキー連盟，1996）④水泳の受講の有無とその理由調査

### 4. 調査の実施

①②は「水泳」の授業時間の初回ガイダンス時と最終回授業終了後に実施した。③はプールでの授業終了後毎回実施した。「学習意欲」「達成」「学習の規律」「かかわり」の4項目について評価を行った。以上の3種類の調査はいずれも用意された質問に対して「はい」、「どちらともいえない」、「いいえ」の3段階で自己評価させた。④は前期の基礎演習Ⅱの時間を活用した。

### 5. 調査結果の処理

①②④の調査では3段階別に該当者を分類し、その結果を割合で示した。③の調査は、学習意欲については「楽しさ」に関する評価因子3項目、技能や認識については「達成」に関する評価因子4項目、学習の規律については「学び方」に関する評価因子

表3 学習評価項目

1. 精一杯全力を尽くして運動することができましたか
2. 今日学習したことは、自分たちにはありましたか。
3. もっと長くやりたかったですか。
4. 深く心に残ること感動することはありましたか。
5. 運動の仕方を考えて練習しましたか。
6. いままでできなかったことが、できるようになりましたか。
7. 「あっそうか」「あっわかった」とおもったことがありましたか。
8. 学習の約束をきちんと守ることができましたか。
9. 運動のルールを守って学習できましたか。
10. 自分から進んで学習することができましたか。
11. 自分のめあてを持って学習できましたか。
12. 仲間に教えてあげたり、教えられたことはありましたか。
13. 仲間と協力して仲良くできましたか
14. 思わず拍手をしたり、「ワーッ」と歓声をあげたことがありましたか。

4項目、かかわりについては「協力」に関する評価因子3項目である。「はい」は3点、「どちらともいえない」は2点、「いいえ」は1点と点数化して整理した。評価因子が3項目の場合は3点から9点、4項目の場合は4点から12点の範囲になり、点数が大きいほど評価が高い。

## 結果

### 1. 「水泳」実技の受講状況について

水泳はカリキュラム上2年次に配置されているた

め、受講対象者は本年度の学部2年生93名(2019.4月現在)と昨年度単位未修得者である。2年生の受講調査(93名中78名の調査協力回答率83.9%)では、受講していると回答した者が55.1%、受講していないと回答した者が44.9%であった(表4)。受講の理由として、「教職必修だから」が90.7%、「水泳が得意だから」4.7%、「水泳が苦手だから」その他「泳げるようになりたいから」という理由がともに2.3%であった(表5)。一方で、受講しない理由として「教職をとらないから」が54.3%、ついで「水泳が苦手だから」28.6%、その他「けがをしているから・疲れるから」11.4%、「水泳が得意だから」5.7%の順であった(表6)。

	％
受講している	55.1
受講していない	44.9

	％
教職必修だから	90.7
水泳が得意だから	4.7
水泳が苦手だから	2.3
その他	2.3

	％
教職をとらないから	54.3
水泳が得意だから	5.7
水泳が苦手だから	28.6
その他	11.4

## 2. 受講生の特徴について

受講生の特徴に関する調査は、1) 運動能力や健康度、2) スポーツに関する興味や関心度、3) 性格特徴、4) 他者との関わり、5) 指導経験・指導意欲の5点とした。表2には、調査①の各調査項目別に調査協力者46名を3段階別に分類し、百分率で示した。

### 1) 運動能力および健康度

表2によれば、「身体を動かすことが好き」と回答した者は97.8%、「夢中になれるスポーツがある」と回答した者が87.0%、「スポーツを見ることが好き」と回答した者が91.3%であった。「小学校、中学校、高校時に受けた体育の授業が好き」と回答した者は89.1%、「体育の成績評価も良かった」と回答した者が84.8%と高い割合であった。しかし、「運動能力に自信があるか」という質問に対して、「ある」と回答した者は60.9%であり、「どちらともい

えない・ない」が39.1%であった。また、「体力に自信があるか」という質問に対して、「ある」と回答した者と「どちらともいえない・ない」と回答した者の割合は50.0%と同様であった。さらに「健康だと思っているか」という質問に対して、「健康である」と回答した者が82.6%、「どちらともいえない」が13.0%、「健康でない」が4.4%であった。

### 2) スポーツに関する興味や関心度

自分自身のスポーツの取り組む姿勢に関して、「さらにうまくなりたいと思っている運動技術がありますか」という質問に対して、「ある」と回答した者が82.6%、「どちらともいえない・ない」が17.4%であった。「運動やスポーツに関する本は読むほうですか」という質問では、「読む」と回答した者が26.0%、「どちらともいえない」「読まない」がともに37.0%であった。さらに「運動やスポーツに関するビデオやDVDは活用しますか」という質問に対して、「活用する」と回答した者が60.8%、「どちらともいえない」「活用しない」がともに19.6%であった。

### 3) 性格の特徴

「明るい性格だと思いますか」という質問に対して、「思う」と回答した者が67.4%、「どちらともいえない」が23.9%、「思わない」が8.7%であった。「忍耐力がありますか」という質問に対して、「ある」と回答した者が43.5%、「どちらともいえない」が37.0%、「ない」が19.5%であった。「努力家だと思いますか?」という質問に対して、「思う」と回答した者が26.1%、「どちらともいえない」が52.2%、「思わない」が21.7%であった。

### 4) 他者との関わり

対人関係についての質問において、「赤ちゃんをみてかわいいと思う」と回答した者が91.4%であり、「子どもが好き」と回答した者が71.8%と高い割合を示した。「幼児と遊ぶことができるか」という質問に対して、「遊べる」と回答した者は73.9%、「どちらともいえない・いいえ」と回答した者が26.1%であった。また、「小学生と遊ぶことができるか」という質問に対して、「できる」と回答した者が67.4%、「どちらともいえない・できない」と回答した者が32.6%であった。「お年寄りと会話ができますか」という質問に対しては、「できる」と回答した者が80.4%、「どちらともいえない・できない」

と回答した者が20.6%であった。さらに「初対面の人も会話することは平気な方ですか」という質問に対しては、「はい」と回答した者が36.9%、「どちらともいえない」が43.5%、「いいえ」が19.6%であった。

### 5) 指導経験・指導意欲

運動やスポーツの指導経験に関する質問において、「ある」と回答した者が84.8%、「どちらともいえない・いいえ」と回答した者が15.2%であった。また、「機会があれば教えたいと思いますか」という質問に対して、「教えたいと思う」67.4%、「どちらともいえない・教えたいと思わない」が32.6%であった。さらに「運動やスポーツの指導者になりたいですか」という質問に対しては、「なりたと思う」と回答した者が65.2%、「どちらともいえない・なりたと思わない」が34.8%であった。「学校の体育の先生になりたいと思いますか」という質問に対して、「なりたと思う」が56.5%、「どちらともいえない」および「なりたと思わない」が43.5%であった。

## 3. 水泳の授業展開について

### 1) 授業内容と指導体制

本年度（2019）の授業内容（シラバス）を表1に示した。15回のうち、13回はプールで実施し、初回のガイダンス及び借用している施設側の都合（水抜き作業日）によりプールを使用できない回（計2回）は大学内の教室で実施した。教室では講義形式で（水泳理論）実施した。水泳の技術（主に4泳法）習得のための練習は施設側の都合もあり、25M屋内プール2コースを借用して実施した。残りのコースは一般市民の方が利用していた。12時間目の立ち泳ぎと救助法の練習の回の際には、水上安全救助員の有資格者の方に加わっていただいた。普段の指導体制は、筆者と現場の有資格者の指導スタッフ2名に依頼して行った。1回の指導の流れについて筆者が毎時間、時案を作成し事前に指導スタッフにメールで送り把握してもらった。授業当日は、13:00発の専用バスに筆者と受講者全員が乗り、約20分かけて市民プールに移動する。更衣を済ませ、授業が開始できるのが大体13:30分であった。最初に筆者が全体に向けて本時の内容説明と模範を示し、その後レベル別に2つの班にわかれ、それぞれ練習をすすめた。14:40分をめでに全ての班が練習を終えて集合

したところで、指導スタッフからそれぞれ感想と助言を述べてもらい挨拶をして練習は終了となる。帰りは待機してもらっていた大学専用バスに15:00までに集合させ、その後出発し大学に到着次第授業は終了、順次解散とした。なお、授業中の安全確保のための監視体制および水質・水温・室温等の環境については施設側に一任したが、特に問題はなかった。

### 2) 受講生の水泳経験と泳力の実態

受講生の水泳経験について、学校体育における水泳の授業の有無（図1）より、小学校時は100%、中学校時は89.1%、高校時は30.4%の者が「授業があった」と回答した。また、学校にプールが整備されていたかについて、小学校時は97.8%、中学校時は87.0%、高校時は32.6%であった（図2）。受講前の泳力（自己申告）については「全く泳げない」と回答した者が6.5%、「25M泳ぐ自信がない」が17.4%、「25M～50M未満」が26.1%、「50M以上100M未満」が23.9%、「泳力には自信がある」が26.1%であった（図3）。泳法については「自信がある」と回答した種目は「平泳ぎ」26.1%、「クロール」23.9%、「背泳ぎ」15.2%、「バタフライ」10.9%であったが、一方で「自信がない」と回答した種目は「バタフライ」67.4%、「背泳ぎ」47.8%、「平泳ぎ」30.4%、「クロール」15.2%という結果であった（図4）。これまでに泳いだことのある場所については、「屋内プール」と回答した者は80.4%、「屋外プール」は93.5%、「川」が60.9%、「海」が58.7%であった（表7）。遠泳経験のある者は8.7%であった（表8）。飛び込みができるかどうかについて、「自信がある」と回答した者は43.5%、「自信がない」が50.0%、「わからない」が6.5%であった（表9）。実際に飛び込み台からの指導を受けたことがあるかについては、「教わったことがある」と回答した者が19.6%、「ない・わからない」が80.4%であった（表10）。水泳指導経験の有無について「ある」と回答した者はわずか2.2%（表11）であったが、「水泳の指導法に関心がある」と回答した者は97.8%（表12）と割合が高かった。しかし、「水泳指導者資格に関心のある者」は34.8%と低い割合であった（表13）。水の事故の経験について「ある」と回答した者が10.9%、「ない」と回答した者が89.1%であった（表14）。事故経験のある者の具体的な内容は「海でおぼれた」「川でおぼれた」「足が攀っておぼれた」であった。

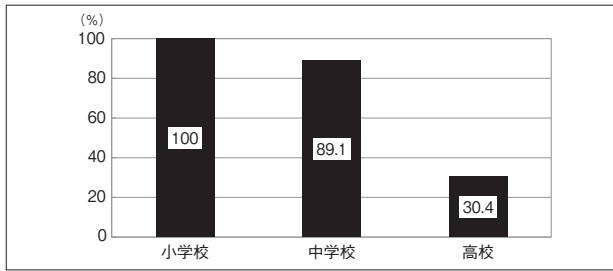


図1 受講者の水泳の授業経験について

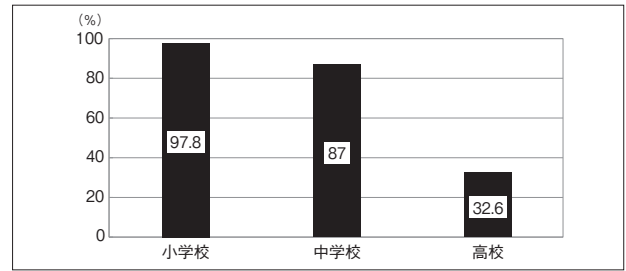


図2 学校プールの設置有り

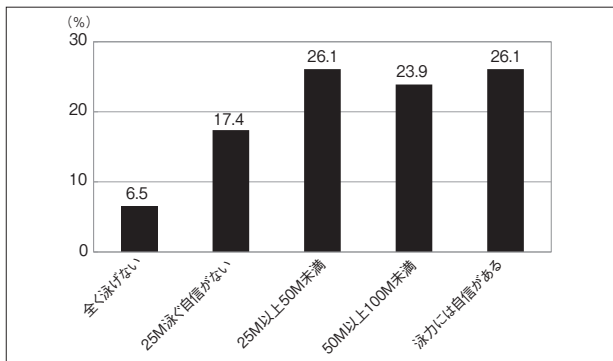


図3 受講前の泳力 (自己申告)

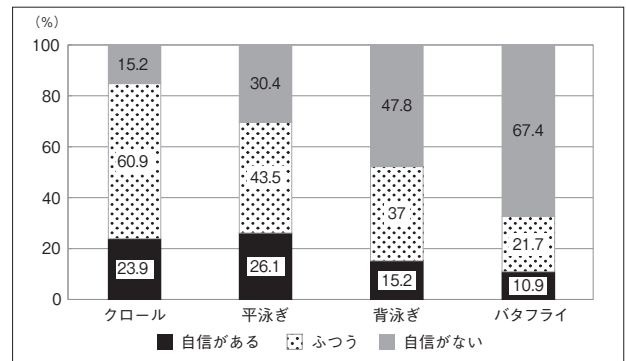


図4 各種泳法について (自己申告)

場所	割合 (%)
屋内プール	80.4
屋外プール	93.5
川	60.9
海	58.7

経験	割合 (%)
あり	8.7
無し	82.6
わからない	8.7

自信	割合 (%)
自信がある	43.5
自信がない	50.0
わからない	6.5

指導の有無	割合 (%)
教わったことがある	19.6
ない	69.6
わからない	10.8

経験	割合 (%)
あり	2.2
無し	97.8

関心	割合 (%)
あり	97.8
無し	2.2

関心	割合 (%)
あり	34.8
無し	34.8
わからない	30.4

経験	割合 (%)
あり	10.9
無し	89.1

#### 4. 受講生の学習評価について

学習評価については、木曜日クラスを表15に、金曜日クラスを表16にそれぞれ示した。2クラスとも練習内容や進度は全く同じであった。学習評価の平均値が「学習意欲」が木曜クラス8.4、金曜クラス8.3、「技能・認識」が木曜クラス11.5、金曜クラス11.6、「学習の規律」が木曜クラス11.8、金曜クラス11.8、「協力」が木曜クラス8.1、金曜クラス7.7で、どの評価項目においても高い評価を示した。また、毎回の練習内容について12段階の自己採点をさせたところ(表17)、その平均値は木曜クラス6.6、金曜クラス7.5で、全体として「普通」から「ややきつい」という結果であった。最終授業終了後の調査では、実技テストの課題である「100M泳ぐことができたか」という質問に対して「はい」と回答した者が全員(100.0%)であった(表18)。また、この課題設定が適切であるかという質問に対して、「適切であ

る」と回答した者が84.8%、「どちらともいえない」と回答した者が13.0%、「不適切であった」が2.2%であった(表19)。受講前より泳力がついたかという質問に対して、「ついた」と回答した者が93.5%、「どちらともいえない」と回答した者が6.5%であった(表20)。また受講前より自信がついたかという質問に対して、「自信がついた」と回答した者が95.7%、「どちらともいえない」が4.3%であった(表21)。中学生や高校生に水泳指導ができるかどうかについては、「できる」と回答した者が34.8%、「どちらともいえない・いいえ」が65.2%であった(表22)。受講後自信のある泳法についての質問では、「クロール」「平泳ぎ」がともに39.1%、「背泳ぎ」17.4%、最も低い割合であったのは「バタフライ」の2.2%であった(図5)。一方で最も自信のない泳法は「バタフライ」が73.9%、次に「背泳ぎ」15.2%、「平泳ぎ」4.4%、「クロール」2.2%の順であった

表15 全日程による学習評価（木曜日クラス）

	楽しさ	達成	学び方	かかわり	学習内容 自己評価
	(学習意欲)	(技能や認識)	(学習の規律)	(協力)	
平均	8.4	11.5	11.8	8.1	6.6
最大値	8.7	12.0	12.0	8.8	7.6
最小値	7.9	10.6	11.7	7.7	5.8

表16 全日程による学習評価（金曜日クラス）

	楽しさ	達成	学び方	かかわり	学習内容 自己評価
	(学習意欲)	(技能や認識)	(学習の規律)	(協力)	
平均	8.3	11.6	11.8	7.7	7.5
最大値	8.8	12.0	12.0	8.7	8.4
最小値	7.9	11.0	11.6	6.8	6.6

表17 本日の練習内容について12段階で評価するならどこにあてはまりますか？

1・2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12
楽	やや楽	普通	ややきつい	きつい	非常にきつい

表18 100M(課題)は泳ぐことができたか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	100.0	0.0	0.0

表19 評価設定は適切であったか %

項目	適切	不適切	どちらともいえない
	84.8	2.2	13.0

表20 受講前より泳力はついたか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	93.5	0.0	6.5

表21 受講前より自信はついたか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	95.7	0.0	4.3

表22 中学生や高校生に指導ができるか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	34.8	34.8	30.4

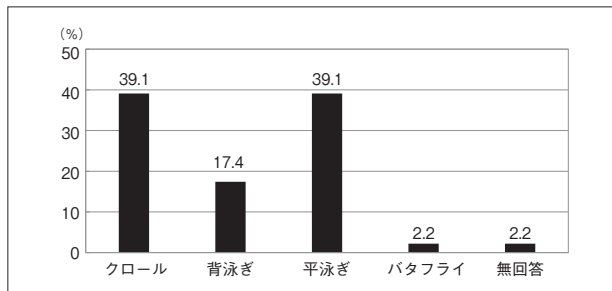


図5 受講後最も自信のある泳法は

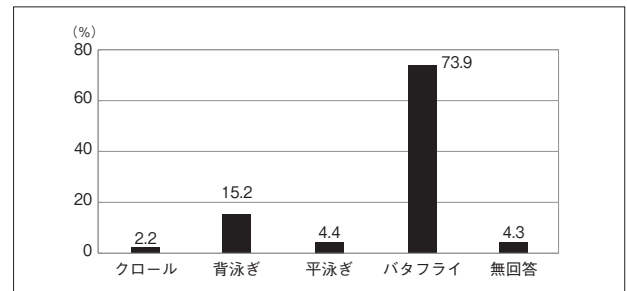


図6 受講後最も自信のない泳法は

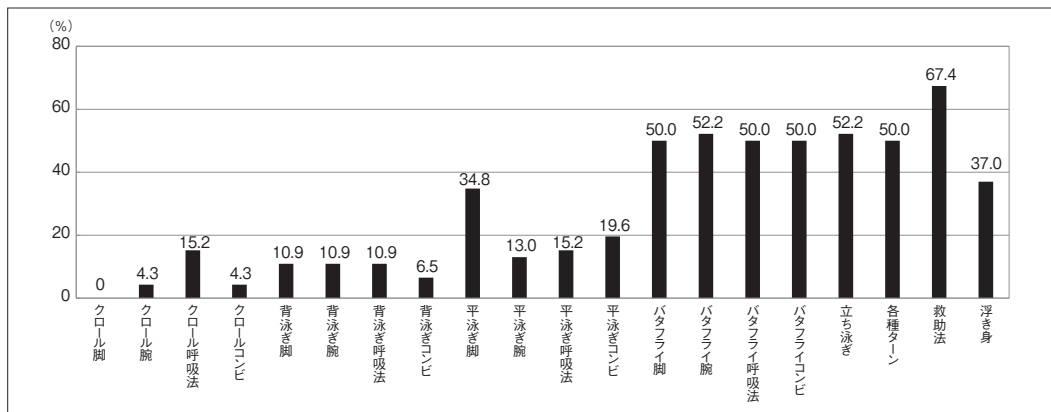


図7 授業内容において最も難しいと感じた項目は何か（複数回答）

(図6)。また、授業内容において最も難しいと感じた項目について、割合の高かった順に「救助法」が67.4%、ついで「立ち泳ぎ」と「バタフライの腕の動作」が52.2%、「バタフライの脚の動作」「バタフライの呼吸動作」「バタフライのコンビネーション」「各種ターン」がすべて50.0%であった(図7)。

環境面については、プールまでのバス移動について「適切である」とした者が82.6%で、「どちらと

もいえない」は17.4%、「不適切である」と回答した者はいなかった(表23)。さらにプールの環境(水深・水温・安全面等)についても「適切である」とした者は97.8%、「どちらともいえない」は2.2%、「不適切である」は0.0%であった(表24)。泳ぐ時間については「適切であった」が91.3%、「長い」とした者が0.0%、「短い」とした者は8.7%であった(表25)。そして指導スタッフについては「適切で

表23 プールまでのバス移動について %

項目	適切	不適切	どちらともいえない
	82.6	0.0	17.4

表24 プールの環境(水深、水温、安全面)について %

項目	適切	不適切	どちらともいえない
	97.8	0.0	2.2

表27 取得希望の免許及び資格について %

中学校保健体育教員免許	78.3
高校保健体育教員免許	91.3
スポーツインストラクター	39.1
スポーツクラブマネージャー	13
初級障害者スポーツ指導員	4.3
中級障害者スポーツ指導員	0
スポーツリーダー	0
レクリエーションインストラクター	2.2

表25 泳ぐ時間はどうだったか %

項目	適切	長い	短い
	91.3	0.0	8.7

表26 指導スタッフは適切であったか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	93.5	0.0	6.5

あった」とした者は93.5%、「どちらともいえない」が6.5%、「適切でない」とした者はいなかった(表26)。

## 考 察

### 1. 水泳受講者の特徴について

本年度は水泳の授業が選択になった結果、受講人数は56名で、昨年度の83名に比較するとかなり減少した。しかし、今回の調査対象者については、表27に示すように教員免許取得希望は中学校が全体の78.3%、高校が91.3%で8割～9割の学生が教員を希望している学生だったために、全体的に向上心が高く、授業に取り組む姿勢が良かったと思われる。結果的に本年度の単位取得者数は、木曜クラス名20名(男子9名、女子11名)と金曜クラス26名(男子15名、女子11名)合計46名で、未取得10名の理由は途中で退学をした者・課外活動において怪我をした者・出席回数不足であった。スポーツ系の学部在籍している学生なので、スポーツや運動をすること自体が好きで、みることも好きな者が多かった。また、これまで受けてきた体育の科目が好きで、成績評価も良かった者の割合が高いという結果を示していたが、現在の自分自身の運動能力や体力に自信のない者が4割～5割、さらに健康に自信のない者が2割もいることが明らかになった。この傾向は昨年度も同様の結果を示しており、スポーツ系の学生としては問題であり、健康教育の必要性が伺われる。スポーツに関する関心度について、各自が取り組んでいるスポーツ種目の技術においては向上心もみられるが、DVDなどの視覚教材は活用するが、専門書を読むことは少ないことが伺える。このことは日頃の学習の様子からも伺うことができ、授業中の私語やスマートフォンを操作するなど授業に集中することができていない者やテキストや筆記用具を持参せずに受講する者、図書館を活用する頻度が少

ない者など、基本的な学習習慣が身につけていない学生が多いことが考えられる。性格について、明るいと自覚している者が約7割であったが、忍耐力や努力については「ない」とした者が約2割もいた。大学生という身体的にも精神的にも充実した時期にスポーツ系の大学で学び、学生アスリートとして活動している学生であることを踏まえると大変残念な結果である。筆者が学部の学生と接していて強く感じることの1つに「諦め」の早い学生が多いということである。「どうせ自分には無理だから」「そんなことは自分にはできないから」と自己否定が多く、前向きに行動してみようという気になかなかならない。「自信がない」ということだと思いが学部の学びの中で、特に実技のような体験型の科目において「達成感」や「できるようになる」という感覚を体得させることは重要であると考えられる。

対人関係において、対象が赤ちゃんや子ども、高齢者などに関わっていくこと自体は特に問題はないようであるが、初対面の人と接することに関しては、どちらかといえば戸惑っている者の割合が約6割と高かった。授業以外は課外活動の仲間とともに過ごすことが多い本学部の学生にとって、様々な対象と関わる機会は大切だと考える。教育実習、インターンシップ、野外教育など学外へ出向いて成果を上げられる教育が必要である。

### 2. 学生の指導経験と指導能力について

受講生の8割～9割が教員免許取得希望者で、水泳も教職必修だからという理由で受講した者が多かった。そのため、運動やスポーツの指導経験のある者が8割、さらに機会があれば教えたいと思っている者の割合も高かったが、最終授業時の調査結果から、保健体育の教員になりたいという学生は6割に満たなかった。また水泳の指導に関しては、受講前は水泳指導経験のある者はほとんどいなかったが、水泳指導法には大半の学生が関心を持っており、



教員志望の熱い思いを伺うことができた。しかし、受講後の調査から、中学生・高校生に水泳指導ができるかと回答した者は4割をきり、水泳の指導力という観点から見ると、今回の半期の授業だけでは身につけていないことが明らかになった。学外へ集団で出かけ、そこで関わる人々や地域の人々の目がある中で実践的な活動をする体験は、机上の教育では得ることができない学びがある。水泳の授業とはいえ場所を変えての活動であるため、学生たちにとっては得るものも多かったと思うが、課題をこなすため、泳ぎの練習をするのに必死になり、課外授業での学びの要素まで吸収できる余裕は全くなかったと思われる。本学部のカリキュラムにおいて、特に教員を目指す学生については、指導する立場に立った時の視点で、物事の考え方や行動の仕方を身につけられるような機会を設ける必要があると思われる。

### 3. 大学の水泳の授業で修得させる泳力について

今回の受講生の学校体育における水泳経験は、小学校の体育の授業においてはすべて行われていたが、中学校では9割をきっていた。しかし、高校においては昨年同様3割程度しか授業として展開されていなかった。中学校の学習指導要領の保健体育分野の1・2学年の「水泳」のねらいの1つには、「4泳法（クロール・平泳ぎ・背泳ぎ・バタフライ）の手と足の動き、呼吸のバランスをとって泳ぐこと」さらに、3学年では「4泳法の手と足の動き・呼吸のバランスを保ち安定したペースで泳ぐこと」と記載されている。同様に高等学校の学習指導要領にはこれら4泳法についてさらに発展的な泳ぎ方を身につけさせるために、「伸びのある動作」や「長く泳ぐ、速く泳ぐ」、「複数の泳法で長く泳ぐことまたはリレーをすること」などの記載がある。小・中学校の義務教育含め、高等学校までの教育を学習指導要領に沿って段階的に学習を積み上げれば、能力差はあるが、大学入学時にはある程度の泳力を身につけていてもよい。しかし、今回の受講生を含めこれまで筆者が担当した水泳の授業を受講した学生の泳力をみても、どのような教育を受けてきたのか疑問を持たずにはいられない。昨今の学校体育で展開される水泳の授業環境は、プールそのものが老朽化のため閉鎖されたり、事故が多いことを理由に飛び込みの指導が禁止されたりなど決して良いとは言えない。昔も今も小学生の頃の夏休みといえば、学校での

プール開放は子どもにとっても親にとってもありがたいことであったが、地球温暖化現象で気温が体温以上にあがることも珍しくなく、水温も異常に上昇し学校プールが開放できない状況に追い込まれている。そのため、民間の営利目的のプール施設が子どもたちで混み合うという事態に至っている。スポーツ庁も今後の学校体育における水泳の授業がスムーズに展開できるよう対策を打ち出して検討しているようだが、全国展開できるようになるにはまだ時間がかかりそうである（読売新聞, 2019）。そのような中で大学の水泳の授業で何をねらいに教育しなければならぬかということ考えた時に、第一には水の事故から自分の身を守るための術を獲得することである。今回の受講生の中にも、過去に川や海でおぼれて怖い思いをした学生が含まれていた。警察庁（2018）によると、昨年度の全国水難事故の発生件数は502件、水難者は595人でうち死者・行方不明者は242人と決して少なくはない。海や川にレジャーで行った先での痛ましい死亡事故が数多く報告されている。今回の受講生も川や海といった自然の中より、圧倒的に屋内外のプールでの泳ぎの経験が多かったため、自然環境下での実践教育はなお必要であると考えられる。第二に、教員養成課程における実技科目になるので、各々の泳力向上はもちろんのこと、中学・高校生に学習指導要領に応じた水泳指導ができるようになることが求められる。今回の受講生の泳力は、受講前調査では「まったく泳げない」「25M泳ぐ自信がない」と回答した者が全体の約3割いた。一方で、50M以上泳ぐことができ泳力に自信のある者は約5割であったが、本来ならさらに泳力を伸ばしつつ、指導力も身につくような教育をするべきと考えられる。しかし、限られた時間内での一斉指導、借用できるコース及び指導スタッフの数などから限界がある。今回の技術評価の課題は、昨年と同様で単位取得の最低条件として「クロールともう1種目で100M泳ぎきること」とした。記録は問わなかったが、シラバス（表1）にあるように4泳法は学習するため、25Mずつ4種目泳ぐことができれば、技術評価は高いと事前に伝えている。しかし、少しでも高い評価を得ようと挑むというより、どちらかと言えば確実に単位が取得できることを優先させる学生が多かった。半期の受講後の学生の授業評価結果から、9割強の学生が、各々の泳力

も向上し自信もついたらと回答していたため全体の指導内容としては概ね高い評価が得られたと思われる。水泳の場合は授業に出席することにより、泳ぎの練習を重ねていくことになるため、真面目に取り組んでいた学生ほど、その上達は目を見張るものがある。そして何よりその成果を本人が実感できるところに意味があると思う。学生の毎回の授業の感想には、「今日はこんなことができるようになった」「指導を受けて、なるほどと思うことがあった」など具体的に記載されていることが多く、授業の回を進めるごとに成長がみられ、筆者が直接声掛けをして褒めると、さらに学生のモチベーションが上がるということが幾度とみられた。まるで小学生のようにもみえるが、実技指導をしていくうえで、タイミングよく声をかけることの大切さをあらためて実感した。また、泳力の高い学生やスイミングスクール経験者からは「1つ1つの泳ぎの動作についてしっかりと考えながら泳ぐことができた」「泳げない子に教えるときの方法がよくわかった」「競争ができるとよかった」などそれぞれ感想が述べられていた。指導法については筆者が授業導入時に部分的に具体例を示し、留意するポイントを紹介する程度しかできなかったが、各班の指導スタッフのやり方を見て各々が吸収したと考えられる。

#### 4. 次年度の水泳の授業に向けて

本年度の水泳の授業全体を踏まえて、3点次年度に向けて留意しておく。

1つ目は事前に受講者の把握ができなかったため、コース借用数の確定が遅れてしまったことである。本年度から水泳が選択科目になり、授業開始の直前まで受講人数やコースの借用数が把握できなかった。学生全員が受講した場合を想定して事前に依頼をしているが、施設側にとっては一般開放をしている時間帯でもあり、一般利用者への周知を徹底するために、できるだけ早期に申請しておきたい。次年度は、受講人数の把握を本年度中に終えておきたいと思う。2つ目として借用しているプールの水深が受講生にとって浅いことである。4泳法の初心者指導には問題はないと思うが、泳力の高い学生や、授業内容に取り入れている救助法の実践をするには思うように成果を上げることができていない。以前、救助法の同じ授業を水深2mのプールで行った経験があるが、「自己の泳力を過信して溺れた人を

助けにいったらならない、自分も死ぬかもしれない」ということを理解させるには、底に足がつかないという環境下での実践は大変効果的であった。この点については環境を変えることが難しいため、指導上の工夫を試みたいと思う。3つ目は、受講生の水泳の指導力を上げていくための対策である。今回の受講生のように大半が教師を目指していることを鑑みれば、やはり半期だけでは限界があるように思う。週2回学外へ移動しての水泳の授業展開は想像以上に負担がかかる。おそらく他の実技種目を指導する時よりも学生の命を預かるという意識が強いからであり、今後も決して慣れることはない。

このように授業を展開するだけでもかなりの労力を要するため、さらに新しい試みをするには専任教員1名の担当ではなかなか厳しいと思われる。来年度は学部が開設されてから完成年度を迎える。引き続き筆者が担当するのであれば、限られた時間内で少しでも成果を上げるための工夫をし、さらに他の大学がどのような授業内容で展開しているのかという情報も得ながら自己研鑽していきたいと考える。

### おわりに

昨年度と同様、怪我や事故もなく半期間の水泳の授業を終えることができたのは、指導スタッフをはじめ、借用施設の管理・運営をしている方や、監視員の方、バスの運転手さんなど多くの方々に支えていただいたからこそである。ここに感謝の意を述べておく。

### 引用文献

- 警察庁統計 (2018) 「平成30年夏期における水難の概況」
- 全日本スキー連盟 (1996) 楽しいスキー教室. スキージャーナル株式会社
- 水野かづみ (2018) 「スポーツ健康科学部における水泳の授業展開について」中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究第4巻 P191～200
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領. P102-120
- 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領. P132-136
- 読売新聞 (2019.8.17) 朝刊